



[水田作部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

2. 水稻「アケボノ」において中干し期間を延長しても、収量、品質は維持される

[要約]

水稻「アケボノ」で中干し期間を最大 17 日間まで延長しても、水稻単作の場合、倒伏が少なく、玄米の収量、品質は低下しない。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 作物・経営研究室

[連絡先] 電話 086-955-0275

[分類] 技術

[背景・ねらい]

水稻栽培において、地球温暖化防止のため、メタンガス発生量抑制につながる中干し延長が求められている。そこで、J-クレジット制度で承認された「水稻栽培における中干し期間の延長」（直近 2 年より中干し期間を 7 日以上延長）に対応しつつ、収量、品質に影響を及ぼさない中干し期間の延長方法について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 高温乾燥条件下で、中干し期間を最大 17 日間まで延長すると、慣行 7 日間の中干しに比べて、土壌の亀裂の幅は広く深くなり、幼穂形成期の草丈が低くなる（図 1、図 2、表 1）。
2. 水稻単作では、中干しを延長すると慣行 7 日間の中干しに比べて稈長が短く、倒伏程度が小さくなる。また、収量及び外観品質には、差はない（表 2）。
3. 稲麦二毛作では、慣行 7 日間の中干しの前に 10 日間延長しても、収量、外観品質は慣行と差がなかったが、中干しを後に 10 日間延長すると、倒伏し、収量、外観品質が劣った（表 2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 令和 6 年に、赤磐市の農業研究所の地力中庸な砂質埴壌土圃場において、基肥窒素量 8 kg/10a の条件で得られた結果である。
2. 中干し終了時の最も幅広い箇所の亀裂は、中干し延長区では、幅約 4 cm、深さ約 15 cm、慣行区でも幅約 2 cm、深さ約 6 cmであった。
3. 本試験ではいずれの区も葉の巻き等の乾燥症状は見られなかったが、生育への著しい影響がみられる場合には中干しを中断し、入水する。
4. 砂壌土や乾きやすい圃場で中干し延長を行う場合、中干し期間中の降雨量により乾燥状態は異なり、中干し後の水持ちは、圃場により異なるため、注意が必要である。
5. 稲麦二毛作における稲作では、前作（麦作）の残存窒素を考慮し、倒伏予防のため基肥の窒素量を調整する必要がある。



[具体的データ]

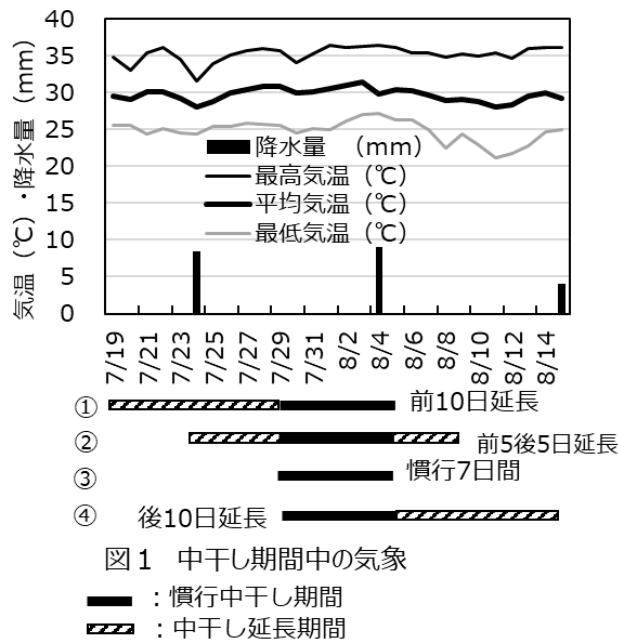
図2 中干し延長区の亀裂の様子
(8月15日、後10日延長区)

表1 中干し延長が「アケボノ」の幼穂形成期の生育に及ぼす影響

区	期間	日数	幼穂形成期(8/15)			
			前作	草丈 cm	茎数 /m ²	葉色 SPAD
①前10延長	7/19-8/5	17	無 麦	65 66	590 505	41 40
②前5後5延長	7/24-8/9	16	無	72	548	40
③慣行	7/29-8/5	7	無	75	495	40
④後10延長	7/29-8/15	17	無 麦	67 73	435 537	38 41

表2 中干し延長が「アケボノ」の収量、品質に及ぼす影響

中干し期間 ²		前	稈長	穂長	倒伏程度	穂数	精玄米重	慣行比	登熟歩合	千粒重	外觀品質 ³	整粒歩合
区	日数	作	cm	cm	0無～4全	本/㎡	kg/10a	%	%	g	1-9	%
①前10延長	17	無	94	19.0	1.3	391	584	97	96	24.0	5.0	62
		麦	94	20.0	1.7	417	617	103	95	23.5	5.5	57
②前5後5延長	16	無	92	19.9	2.0	418	635	106	95	24.1	5.0	59
③慣行	7	無	101	19.7	2.3	405	600	100	95	24.3	6.0	60
④後10延長	17	無	92	18.9	1.7	365	617	103	97	24.0	4.5	63
		麦	101	18.9	4.0	453	488	81	88	23.3	7.0	50

²①7/19-8/5、②7/24-8/9、③7/29-8/5、④7/29-8/15³1（1等上）～9（3等下、規格外）の9段階評価

[その他]

研究課題名：水稻、麦類の二毛作栽培における稲わら、麦わらの有効活用技術の確立

予算区分・研究期間：県単・令6～8年度

研究担当者：金谷寛子